

## 送別の贈りもの ―魏晋南北朝詩における送別の贈答―

佐藤 大志

### はじめに

『顔氏家訓』風操には、当時の江南地方では餞別の時に涙を流すのに対して、北方の習俗では笑顔で別れるという違いがあることが話題とされている<sup>〔1〕</sup>。送別の習俗には、その時代や地域の文化が現れるものであり、また送別の時に相手に何を贈るかということには、その詩人の、またはその詩人が属する共同体の価値観が現れるであろう。

稿者は先に「折楊柳」という送別の習俗について、これが唐以前にはまだ詩歌の世界には現れず、それが詩歌の世界に現れるのは、盛唐から中唐にかけてのことではないかということ指摘した<sup>〔2〕</sup>。ここでは「折楊柳」の変遷を追うことを主としたために、送別詩全体における「折楊柳」の占める位置については考えることができず、また「折楊柳」という習俗が中唐以後に現れるのであれば、それ以前の詩では送別の時に何を贈り合っていたのかということも明らかにすることはできなかった。

そこで、本稿では魏晋南北朝期の詩を対象として、旅立つ人を見送る送別詩<sup>〔3〕</sup>において、彼らは何を贈り合い、また何を贈るべきと考えていたのかについて明らかにしてみたい。

### 一、古代の送別と贈答

『周礼』秋官・司儀には「致饗餼、還圭、饗食、致贈、郊送、皆如将幣之儀。」（饗餼を致り、圭を還し、饗食し、贈を致り、郊送すること、皆幣を将ふの儀の如し。）とあり、賓客を見送る際の儀礼の一つに「致贈」の礼が見える。この「致贈」について、鄭司農の注に「贈送以財、既贈又送至郊。」（送に贈るに財を以てす、既に贈して又送りに郊に至る。）とあり、送別の贈りものとして財物を贈り、その上で更に郊外まで見送るのだと説明されている。そして、この『周礼』秋官・司儀に見える送別の儀礼とおぼしきことが、『毛詩』大雅「韓奕」に次のように見える。

#### 『毛詩』大雅「韓奕」

韓侯出祖	韓侯出でて祖す
出宿于屠	出でて屠に宿す
顯父餞之	顯父 之を餞す
清酒百壺	清酒は百壺
其殺維何	其の殺は維れ何ぞ
兪鼈鮮魚	兪鼈 鮮魚
其蔌維何	其の蔌は維れ何ぞ
維筍及蒲	維れ筍及び蒲
其贈維何	其の贈は維れ何ぞ
乘馬路車	乘馬 路車
籩豆有且	籩豆 且たること有り
侯氏燕胥	侯氏 燕胥す

この詩は天子に朝見して自国へ帰る韓侯を、周の公卿が都の郊外まで見送り、そこで祖餞の宴を開く様を描く。そして酒や肴をならべた盛大な酒宴の描写の後に、送別の贈りものとして「乘馬路車」が贈られることが記される。鄭箋には「贈送也。王既使顯父餞之、又使送以車馬、所以贈厚意也。人君之車曰路車、所駕之馬曰乘馬。」（贈は送なり。王既に顯父をして之を餞し、又送るに車馬を以てせしむるは、厚意を贈る所以なり。人君の車を路車と曰ひ、駕する所の馬を乘馬と曰ふ。）とあり、貴頭の公卿に郊外で祖餞の宴を開かせて韓侯をもてなした上で、更に贈りものをするのは、韓侯に対する周王の厚意

を示すためであると説明する。

他にも秦風「渭陽」には、舅氏を見送る際に財物を贈る例が見える。

#### 『毛詩』秦風「渭陽」

我送舅氏	我 舅氏を送りて
曰至渭陽	曰に渭陽に至る
何以贈之	何を以て之に贈らん
路車乘黃	路車 乘黃
我送舅氏	我 舅氏を送りて
悠悠我思	悠悠たる我が思
何以贈之	何を以て之に贈らん
瓊瑰玉佩	瓊瑰 玉佩

この詩では舅氏を渭水の北まで見送り、そこで贈りものとして、「路車乘黃」と「瓊瑰玉佩」を贈ったことを言う。「乘黃」は四頭立ての馬、「瓊瑰」は玉に次ぐ美石を指し、四頭立ての馬車に加えて、美しい宝石と佩玉を贈ることで、舅氏への尽きぬ思いを示そうとしている<sup>〔4〕</sup>。

これらは賓客を見送る儀礼を背景とするものであり、そこでは旅立つ者（客）に見送る者（主人）の厚意を示すために、車馬や佩玉などの高価な財物や礼物が贈られる、或いは贈られるべきであることが示されている<sup>〔5〕</sup>。

その一方で、送別に物ではなく、言葉を贈ることも古くから行われていたようである。

『毛詩』檜風「匪風」

誰能亨魚 誰か能く魚を亨ん  
 溉之釜鬻 之が釜鬻を溉がん  
 誰將西帰 誰か將に西に帰らん  
 懷之好音 之に好音を懷らん

結びの二句について、鄭箋に「誰將者、亦言人偶能輔周道治民者也。檜在周之東、故言西帰。有能西仕於周者、我則懷之以好音。謂周之旧政令。」（誰將とは、亦能く周道を輔け民を治むる者を人偶ふなり。檜は周の東に在り、故に西に帰ると言ふ。能く西のかた周に仕ふる者有らば、我則ち之に懷るに好音を以てす。周の旧政令を謂ふなり。）とあり、この詩は西方の周都に仕えようとする者を敬い、贈りものとして「好音」を贈ろうとすることを詠んだとされる。鄭箋は「好音」は周の古い政令であると具体的に示すが、これは旅立つ者に贈る良き言葉と見てよいだろう。

このように送別の時には、古くから財物や礼物といった物を贈る場合と、価値のある良き言葉を贈る場合があったことが知れる。この物と言葉の贈りものについて、『荀子』大略には、君子は「言」を、庶人は「財」を贈るものだという言葉が引かれている。

『荀子』大略

曾子行、晏子従於郊、曰、嬰聞之。君子贈人以言、庶人贈人以財。嬰貧無財、請仮於君子贈吾子以言。…（曾子の行くや、晏子郊に従ひて、曰はく、嬰之を聞けり。君子は人に贈るに言を以てし、庶人は人に贈るに財を以てす。嬰貧にして財無ければ、請ふ君子に仮りて吾子に贈るに言を以てす。…）

右は曾子が吝を去るとき、郊外まで見送った晏子が「財」の代わりに「言」を贈ったとされる逸話を記したものであり、これに続く部分には晏子が曾子に贈った言葉が続く。これと似たような逸話は、『史記』孔子世家にも見え、そこでは老子に面会した孔子が辞去する際に、老子が孔子に贈った言葉として「吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言。吾不能富貴、窃仁人之号、送子以言。」（吾は富貴は人を送るに財を以てし、仁人は人を送るに言を以てすと聞けり。吾は富貴なる能はずして、仁人の号を窃みて、子を送るに言を以てせん。）とある。

この二つの逸話に示されているように、送別の贈りものには、古くから「財」と「言」を贈る場合があり、漢初までには君子や仁人は「言」を、庶人や富貴は「財」を贈るとする認識があったことが知れる。

漢代の作とされる送別詩には「財」や「言」を贈ることを明言するものは見当たらないようだが、次の『玉台新詠』巻一に採録される「古詩八首」の第七首は、送別

に際して友に別れの言葉（「自愛」）を贈る例と見て良いだろう<sup>6</sup>。

「古詩八首」其七（『玉台新詠』巻一）

悲与親友別 親友と別るるを悲しむ  
 氣結不能言 氣結ぼれて 言ふ能はず  
 贈子以自愛 子に贈るに自愛を以てす  
 道遠会见難 道遠くして 会見ふこと難し  
 人生無幾時 人生 幾の時も無く  
 顛沛在其間 顛沛 其の間に在り  
 念子棄我去 念ふ 子の我を棄てて去り  
 新心有所歛 新心に歛ぶ所有るを  
 結志青雲上 志を青雲の上に結び  
 何時復来還 何れの時か復た来り還らん

龜山朗氏は先に引用した『荀子』大略や『史記』孔子世家の記述を挙げて、送別に言葉を贈ることは古くから行われていたことを指摘した上で、送別に贈られる言葉には、普通の言葉にはない特別なちからを持った特殊な様式が要求され、やがて「その特殊な様式として（詩）を採用することが次第に一般化してきた」と仮定する<sup>7</sup>。右に引用した古詩も普通の言葉でなく、特殊な様式としての（詩）が送別の言葉として用いられた例とするこ

れてはいない。

龜山氏は、別れに際して詩を贈るということは、建安時代か或いはその少し前あたりであろうと予想し、それが本格的に行われるようになるのは、荊州の劉表の下に身を寄せていた王粲の頃より始まると指摘するが<sup>8</sup>、送別の贈りものとして自作の詩を贈る行為を詩の中に詠み込む例も、この荊州期の王粲の送別詩に見える。

次節では三国から劉宋に至る送別詩をとりあげ、送別の贈りものとして、何がどのように表現されていくのかを見てゆきたい。

二、三国・晋・宋の送別詩と贈答

まずは荊州期の王粲の送別詩から、送別の贈りものとして自作の詩を贈ることを詩中に読み込む例を挙げる。この詩は王粲が乱を避けて荊州に身を寄せていたとき、友人の蔡睦が故郷に帰るのを見送った時の作とされ、次の引用はその結びの部分である。

王粲「贈蔡子篤詩」（『文選』巻二三）

及子同寮 子と寮を同じくし  
 生死固之 生死も之を固くせん  
 何以贈行 何を以て行に贈らん  
 言授斯詩 言に斯の詩を授く

中心孔悼 中心 孔だ悼み  
涕淚漣漣 涕淚 漣漣たり  
嗟爾君子 嗟 爾 君子  
如何勿思 如何ぞ 思ふ勿からん

「何以贈行」という措辞は、『毛詩』秦風「渭陽」のそれを踏まえるようであるが、「渭陽」では「路車乘黃」「瓊瑰玉佩」と財物を贈っていたところを、ここでは送別の贈りものとして、「斯詩」を受けようと言う。  
次の「贈文叔良」も同じように送別の贈りものとして自作の詩を贈っており、更にその詩にどのような思いを託したのかを述べる。

#### 王粲「贈文叔良」(『文選』卷二三)

緬彼行人 緬はるるかな 彼の行人  
鮮克弗留 克く留まらざること鮮し  
尚哉君子 尚きかな 君子  
于異他仇 于に他の仇に異なるべし  
人誰不勤 人は誰か勤めざらん  
無厚我憂 我が憂ひを厚くすること無かれ  
惟詩作贈 惟れ詩 作り贈り  
敢詠在舟 敢て在舟を詠めり

この詩は荊州から益州に使者として出発する文穎を見

送った時の作であり、右に引用した結びの部分では、益州に使いした者の多くが帰ってこなかったこと、文穎は優れた人物なので彼らと異なっているのだから、国の為に勤めを果たして、私の憂いを深くすることがないようにと言う。このように困難な使命を帯びた文穎を励ました後に、結びの二句では、ここに詩を作って贈ったのは、「在舟」の思いを伝えたかったからと言う。

「在舟」とは李善注に拠れば、『鄧析子』無厚の「同舟渡海、中流遇風、救患若一、所憂同也。」(同舟して舟を渡るに、中流にして風に遇ひ、患を救ふこと一の若く、憂ふる所同じきなり。)に基づき、相手と憂患をともにしようとする志を言う。

このように荊州期の王粲の送別詩には、送別の時に制作した自作の詩を相手に贈るという行為を詩の中に読み込む例が見える。この他にも邯鄲淳「答贈詩」(『芸文類聚』卷三二)には「餞我路隅、贈我嘉辞。既受德音、敢不答之。」(我を路隅に餞し、我に嘉辞を贈る。既に德音を受け、敢て之に答へざらん。)とあり、これは送別の場で相手から「嘉辞」を贈られ、その「德音」に報いるために詩をお返ししようと言う<sup>16)</sup>。

この送別の贈りものとして自作の詩を贈る行為を、詩の中に読み込むことは西晋の詩にも引きつづき見られるのだが、西晋の送別詩では、古言や教訓を詩中に引用して、それを送別の言葉として贈る例も散見する。

例えば、潘尼「贈隴西太守張仲治詩」(『芸文類聚』卷

愧無雜佩贈 愧づらくは雜佩の贈無く  
良訊代兼金 良訊もて兼金に代へん  
夫子茂遠猷 夫子 遠猷を茂くし  
款誠寄惠音 款誠もて惠音を寄せよ

「雜佩贈」は、『毛詩』鄭風「女曰鷄鳴」の「知子之來之、雜佩以贈之。」(子の之を來すを知らば、雜佩以て之に贈らん。)を踏まえる語であり、「雜佩」は様々な種類の佩玉を指し、それは旅立つ者に対する厚意を表す贈りものとされる。ここではそのようなさまざまな佩玉を自分を持ち合わせていないので、高価な金の代わりに良き言葉をもつてはなむけとしようと言う。これは先に引用した『荀子』や『史記』において、晏子や老子が自ら謙遜して、貧しいが故に財物がないので、仮に君子や仁人のように言葉を送別の贈りものとして贈りましようと言った、その発想を踏まえたものであろう。

この陸機の詩は、馮文龍が旅立つ時に陸機が贈った送別の詩に対して、馮文龍からの応答の詩があり、その返しの詩に対して更に陸機が答えた詩であるので、実際には送別の後に二人が既に遠く離れている時の作だが、これと同じような表現は送別の時の作と考えられる詩にも見える。

例えば、潘尼「送盧弋陽景宣詩」(『芸文類聚』卷二九)には「愧無紵衣獻、貽言取諸懷。」(愧づらくは紵衣の獻無く、言を貽りて諸懷を取らん。)、陸雲「贈汲郡太守八

三二)は「及子仍同僚、贈言貽爾躬。威刑有時用、唯德可念終。」(子と僚を同じくするに仍りて、言を贈りて爾が躬に貽る。威刑は時に用ふるに有り、唯だ徳もて終ふるを念ふべし。)とある。ここでは、隴西太守として赴任する人物に対して、厳しい刑罰は必要に応じて用い、徳を以て民を治めることを基本とすべきことを説いた言葉が贈られている。  
また石崇「答賈謏詩」(『芸文類聚』卷三二)には「言念將別、睹物傷情。贈爾話言、要在遺名。惟此遺名、可以全生。」(言に將に別れんとするを念ひ、物を睹ては情を傷ましむ。爾に話言を贈らん、要は名を遺すに在り。此の名を遺すを惟ひて、以て生を全うすべし。)とある。「話言」は『毛詩』大雅「抑」に基づく語で、古の善言を意味し<sup>17)</sup>、ここでは「名を残すこと」が善言として引かれ、送別に贈る言葉として贈られている。  
次の陸機「贈馮文龍詩」も送別の時に言葉を贈る例の一つだが、ここでは財物や礼物を贈ることと、言葉を贈ることが対比的に用いられている。

#### 陸機「贈馮文龍詩」(『文選』卷二四)

分索古所悲 分索は古の悲しむ所  
志士多苦心 志士は心を苦しむこと多し  
悲情臨川結 悲情は川に臨みて結ばれ  
苦言隨風吟 苦言は風に隨ひて吟ず

章」『古詩紀』卷二六）には「之子之遠、悠悠我思。雖無贈之、歌以言志。」（之の子の遠ざかり、悠悠たり我が思ふ。之に贈る無きと雖も、歌ひて以て志を言ふ。）とある。このように、相手に贈るべき物がなく、次善の贈りものとして言葉や詩歌を贈ると言う表現は、送別詩を含む贈答詩の常套表現として、当時用いられていたようである。

またその一方で、贈答の言葉を千金や宝玉などの財物よりも価値を高く見積もろうとする例も見える。例えば、次の東晋・孫綽の詩などはその例である。ここでは結びの八句のみを引用する。

#### 孫綽「与庾冰詩十三章」其十三

〔文館詞林〕卷一五七）

古人重離	古人は離るるを重んじ
必有贈遷	必ず贈遷すること有り
千金之遺	千金の遺 <small>おくりもの</small>
孰与片言	片言に孰 <small>いづれ</small> ぞ
励矣庾生	励めよ庾生
勉蹤前賢	勉めて前賢に蹤 <small>したが</small> へ
何以將行	何を以て將た行はん
取諸斯篇	諸を斯の篇に取れ

先に陸機は「愧無雜佩贈、良訊代兼金」と「雜佩贈」

識意在忘言	意を識るは 言を忘るるに在り
瓊琚尚交好	瓊琚は交好を尚 <small>おほ</small> び
桃李貴往還	桃李は往還を貴 <small>たが</small> ぶ
蕭艾苟見納	蕭艾 苟も納めらるれば
貽我以芳蘭	我に貽るに芳蘭を以てせん

この詩は『芸文類聚』卷三二にこの八句のみが引用されており、本来はもう少し長編の詩であった可能性がある。まず冒頭では「物を贈る」ことは「陋薄」であると言ひ、次の「識意在忘言」は、彼の『莊子』外物の言葉に基づき、意を得ることができれば、その道具としての言葉は忘れられることを言う。

ここで「物」が何を指すのかが問題なのだが、続く二句が『毛詩』衛風「木瓜」を踏まえて、「瓊琚」や「桃李」を相手に贈ることを交友や交際を貴ぶ行為であると言うところから、贈られる「物」とは第一義には「瓊琚」や「桃李」のような贈答の物品を指すのであろう。しかし「忘言」とあり、また自らの詩（「蕭艾」）を送別の贈り物として相手に贈っているのので、「物」には言葉や詩も含まれる可能性もある。

いずれにしても、ここで潘尼が「物」を贈ることの意味を問うていることは注目していいのではあるまいか。目的は「意」であれば、それが「財」であろうが、「言」であろうが、また「詩」であろうが構わないのである。そしてこのような「物」に執着しない発想は、『文選』に

が無いことを恥じ、「兼金」の代わりに良き言葉を贈ると語っていた。それは一種のポーズであり、また謙辞でもあろうが、言葉を贈ることは次善の贈りものであるという意識がその表現にはうかがえた。これに対して、孫綽は古来離別は人の重んじるところであり、必ず送別の贈りものをしたことを挙げ、その上で「千金之遺」と「片言」を並べて両者の優劣を問うている。

更に劉宋・傅亮の「奉迎大駕道路賦詩」〔宋書〕傅亮伝〕には「夙懼発皇邑、有人祖我舟。餞離不以幣、贈言重琳球。」（夙懼 皇邑を發し、人の我が舟を祖する有り。離るるを餞するに幣を以てせず、言を贈るは琳球より重し。）とあり、離れゆく者を見送る時に車馬や玉帛のような幣物ではなく、言葉を贈ることは琳球のような美玉を贈るよりも重いことだと言う。これは、『荀子』非相に「故贈人以言、重於金石珠玉。」（故に人に贈るに言を以てするは、金石珠玉よりも重し。）とあり、表現としては古くより見えるものであるけれども、『荀子』では君子が言葉を人に与えるときのことを言うのに対して、傅亮は送別の時の贈りものとして、言葉が幣物や美玉よりも重いと言っているのである。

また西晋の詩においては、潘尼の詩に送別の贈りものに関して、いくつか注目すべき例がみえる。

潘尼「送大將軍掾盧晏詩」〔芸文類聚』卷三一）  
贈物雖陋薄 物を贈るは 陋薄なりと雖も

も収録される「贈陸機出為吳王郎中令」にもうかがうことができそうである。

潘尼「贈陸機出為吳王郎中令」〔文選』卷二四）	
...	...
昔予忝私	昔予 私を忝 <small>かたじけな</small> くし
貽我蕙蘭	我に蕙蘭を貽 <small>おく</small> れり
今子徂東	今子は東に徂 <small>ゆ</small> かんとす
何以贈旃	何を以て旃に贈らん
寸晷惟宝	寸晷は惟れ宝なり
豈無瓊瑤	豈 瓊と瑤と無からんや
彼美陸生	彼の美なる陸生
可与晤言	与に晤言す可し

この詩は陸機が吳王の郎中令として赴任するときには作られた詩であり、右の引用はその結びの部分である。かつて陸機から詩を贈られたことに感謝しつつ、彼の旅立ちに何を贈りものとしようかと問うもので、送別詩の結びの定型を踏まえる。

ここでまず潘尼はかつて陸機から贈られた詩を「蕙」と「蘭」に譬える。相手から贈られた詩を香草に譬えることは先の「送大將軍掾盧晏詩」にも見え、そこでは自分の詩を「蕭艾」に、相手からの応答の詩を「芳蘭」に譬えていた。

次に潘尼は東の呉に赴任する陸機の送別に一体何を贈

りものとしようかと問い、「璵」や「璠」のような美玉がないわけではないけれども、「寸晷」すなわち時間を宝として贈ろうと言う。李善注に拠れば、これは『淮南子』原道訓の「故聖人不貴尺之璧、而重寸之陰、時難得而易失也。」（故に聖人は尺の璧を貴ばず、寸の陰を重んず、時は得難くして失ひ易きなり。）に基づく言葉である。故にここで潘尼は『淮南子』を基に「寸晷惟宝」という言葉を陸機に贈ったと解釈できる。

ただ、当時の贈答詩では古言や教訓などの言葉を贈る場合は「贈言○○」「贈○話言」という句の後に贈る言葉をつき、「何以贈○」の句の後には贈りものが来るのが常であることからすれば、表現としては「時間」を宝として送別の贈りものとしましようと言い、意味としては「時間は大切なものだ」という言葉を贈ることになるのである。

また「寸晷惟宝」が贈る言葉なのか、或いは贈りものなのか、いずれであったとしても、それが「璵璠」に劣らない宝なのだとする点も注目に値する。「璵璠」は『春秋』定公五年の左氏伝「陽虎將以璵璠」の杜預注に「璵璠、美玉。君所佩。」（璵璠は、美玉なり。君の佩ぶる所。）とあるように君主の佩玉に用いられる美玉である。

先に示したように、西晋の贈答の詩には、佩玉のような高価な礼物を贈ることを前提とし、次善の贈りものとして言葉や詩歌が贈られるという常套表現が用いられていた。これに対して、潘尼は璵璠のような佩玉<sup>〔註〕</sup>が自

分には無いというわけではないとして、璵璠よりも時間を宝として、或いは時間は宝であるという言葉を送ろうと言うのである。ここには、先の孫綽や傅亮へと連なる高価な礼物や財物よりも、言葉の価値を高く見積もろうとする発想がうかがえるであろう。

このように西晋から劉宋にかけての送別詩では、送別の贈りものとして、言葉や詩歌を贈ることが常だったようである。また西晋には建前として、財物や礼物を贈ることを前提とし、言葉や詩歌を贈ることを次善のこととすることを常套表現として用いる傾向もあった。それが西晋から劉宋にかけて、物よりも言葉の価値を高く見積もる意識もうかがうことができた。しかし、古くより用いられてきた「財」と「言」以外のものが、送別の贈りものとして用いられるということは、この時期にはまだ詩歌の世界には現れてきていないようである。

### 三、齊梁の送別詩と贈答

松原明氏<sup>〔註〕</sup>は齊梁期には離別詩の作品は目に見えて増大すると指摘する。しかし、齊梁期の送別詩において、送別の贈りものについて言及する作品は必ずしも多くはない。そのなかで、それ以前の送別詩にも用いられていた言葉や詩歌を送別の贈りものとする例は、齊梁期以降にも引きつづき見ることができる。

#### 謝朓「奉和隨王殿下詩十六首」其十四

〔『謝宣城詩集』卷五〕

分悲玉瑟斷	分 <sup>わか</sup> れの悲しさに玉瑟斷へ
別緒金樽傾	別れの緒に金樽傾く
風入芳帷散	風の入りて芳しき帷は散じ
紅華蘭殿明	紅華は蘭殿に明かなり
想折中園草	中園の草を折りて
共知千里情	共に千里の情を知らんと想ふ
行雲故鄉色	行雲 故郷の色
贈子一離声	子に贈る 一たび離 <sup>はな</sup> るるの声

この詩は謝朓が荊州の隨王の下を離れて都に帰る時の作と考えられる。前半は別離の悲しみと送別の宴の様が描かれ、後半は送別の宴で別れた後の千里離れた思いを知らうと共に園中の草を折りつつ別れを惜しみ、望郷の思いに引かれて別れを告げることと言う。その結びの句に「贈子一離声」とある。この「離声」は別れの言葉であり、またいま別れに当たって隨王に贈ろうとする自分の詩歌そのものをも指すのであろう。

また次の呉均の詩は川辺で親しい友人と別れる時に、送別の言葉として「好音」を贈ろうと言う。

#### 呉均「発湘州贈親故別詩三首」其一

〔『文苑英華』卷二八六〕

相送出江潯 相送りて 江潯を出で

淚下霑衣襟 淚下りて 衣襟を霑<sup>ぬ</sup>す

何用叙離別 何を用て 離別を叙べん

臨岐贈好音 岐に臨みて 好音を贈らん

敬通才如此 敬通 才は此の如く

君山學復深 君山 學は復た深し

明哲遂無賞 明哲 遂に賞さるる無く

文華空見沈 文華 空しく沈めらる

古來非一日 古來 一日に非ず

無事更勞心 更に心を勞するを事とする無かれ

「好音」は、先に引いた『毛詩』檜風「匪風」に旅立つ者に贈る良き言葉として見え、また潘岳「為賈謐作贈陸機」〔『文選』卷二四〕に「發言為詩、俟望好音。」（言に発して詩を為り、好音を俟ち望む。）とあり、相手からの応答の詩を美化して「好音」とする先例が見える。ここで呉均は、第五句以降に述べる「親故」に贈る送別の言葉を「好音」と表現している。

そして、次の呉均の詩は送別の贈りものとして萱草（忘れな草）を贈るという珍しい例である。

#### 呉均「酬別江主簿屯騎」〔『文苑英華』卷二六六〕

有客告將離 客の將に離れんとするを告ぐる有り

贈言重蘭蕙 言を贈るは蘭蕙より重し

泛舟当泛濟 舟を泛<sup>ふか</sup>ぶは当に濟に泛ぶべし

結交当結桂 交を結ぶは当に桂を結ぶべし

濟水有清源 濟水には清源有り  
 桂樹多芳根 桂樹には芳根有り  
 毛公与朱亥 毛公と朱亥と  
 俱在信陵門 俱に信陵の門に在り  
 趙瑟鳳凰柱 趙瑟には鳳凰の柱  
 吳醪金疊樽 吳醪には金疊の樽  
 我有北山志 我に北山の志有るも  
 留連為報恩 留連して為に恩に報ゆ  
 夫君皆逸翮 夫君は皆逸翮にして  
 搏景復凌鸞 景を搏ちて復た凌鸞せん  
 白雲間海樹 白雲 海樹を間て  
 秋日暗平原 秋日 平原に暗し  
 寒虫鳴趨趨 寒虫鳴きて 趨趨たり  
 落葉飛翩翩 落葉飛びて 翩翩たり  
 何用贈分首 何を用て分首に贈らん  
 自有北堂萱 自から北堂の萱有り

この詩は呉均が江蓠との離別に際して作った詩であり、これまで交友を結び、ともに君主に仕えてきたけれども、自分は隠棲の志があり、江蓠らはこれから高く飛び立ち榮達の道を進んでゆき、離ればなれとなってしまう。そして別離の後の寂寥を示すような秋の景物を詠んだ後、結びの句では送別の贈りものとして「北堂萱」が贈られている。

この「北堂萱」は、『毛詩』衛風「伯兮」の「焉得諼草、

言樹之背。願言思伯、使我心瘳。」（焉んぞ諼草を得て、言に之を背に樹ゑん。願ひて言に伯を思ひ、我が心をして瘳ましむ。）を踏まえたものであり、先の潘尼の「贈陸機出為吳王郎中令」と同じように、表現としては「北堂萱」を贈ると言いつつ、その意味するところは『毛詩』衛風「伯兮」を踏まえた言葉、すなわち別れた後に相手を思つて互いに忘れることができないだろうから、彼の北堂の萱（忘れ草）を贈りましようということであろう。故にこれもまた送別の贈りものとして、相手に自分の思いを込めた言葉を贈った例と見てよいであろう。

このようにこの呉均の詩も送別の贈りものとして、言葉や詩歌を贈る例と考えられるのだが、この詩で注目されるのは、詩の冒頭に「贈言重蘭蕙」と、送別に言葉を贈ることと「蘭蕙」とを比べて、言葉を贈ることが勝ると始まることである。

先に引用した劉宋・傅亮の「奉迎大駕道路賦詩」には「餞離不以幣、贈言重琳球」とあり、言葉を贈ることは「琳球」のような佩玉を贈ることより重いとあつた。このように言葉を贈ることは、金玉や佩玉のような財物や礼物を贈るよりも重いこととされていたのに対して、ここで呉均は「蘭蕙」を比較の対象として挙げているのである。

この「蘭蕙」について林家驥『吳均集校注』（浙江古籍出版社・二〇〇五）は蘭と蕙はいずれも香草であり、ここは贈る言葉の美しさをたとえたものだという。先に引

用した潘尼「贈陸機出為吳王郎中令」でも陸機からかつて贈られた詩を「蕙蘭」と言い、その詩を美化した表現として見えた。

しかし、傅亮の例から考えても、ここで「蘭蕙」は金玉や佩玉のような贈りものの例として、言葉と対比されており、また言葉（「言」と詩（「蘭蕙」）とを対比してその優劣を問うのも不自然であろう。恐らく呉均の詩の「蘭蕙」は、香草の「蘭蕙」を指し、それを折りとつて愛する人に贈るものとして、言葉と対比して用いられているのではなからうか。

「蘭蕙」を折りとつて愛する人に贈るという例は、古詩や張華「情詩」、傅玄「擬四愁詩」などに用例が見える。ここでは『文選』に収録される張華「情詩二首」其二を挙げると次のようである。

張華「情詩二首」其二（『文選』卷二九）  
 遊目四野外 目を四野の外に遊ばしめ  
 逍遙独延佇 逍遙して 独り延佇す  
 蘭蕙綠清渠 蘭蕙 清渠に緑り  
 繁華蔭綠渚 繁華 緑渚を蔭ふ  
 佳人不在茲 佳人 茲に在らず  
 取此欲誰与 此を取りて誰にか与へんと欲す  
 巢居知風寒 巢居は風寒を知り  
 穴処識陰雨 穴処は陰雨を識る  
 不曾遠別離 曾て遠く別離せずんば

安知慕儔侶 安んぞ儔侶を慕ふを知らんや  
 安んぞ儔侶を慕ふを知らんや

このように香草や花木を折りとつて遠くの人に贈りたいという発想は『楚辞』にその源を発し、古楽府や古詩へと継承されてゆくとされる。『楚辞』九歌「大司命」には「折疏麻兮瑶華、将以遺兮離居。老冉冉兮既極、不寢近兮愈疏。乘龍兮驂麟、高馳兮冲天。結桂枝兮延佇、羌愈思兮愁人。」（疏麻の瑶華を折りて、將に以て離居に遺らん。とす。老冉冉として既に極まるに、寢く近づかずして愈疏たり。龍に乗りて驂麟と、高く馳せて天に沖す。桂枝を結んで延佇し、羌愈思ひて人をして愁へしむ。）とあり、神麻の花や桂の枝を折りとつて遠く離れた人に贈らんとする「折物寄遠」のモチーフが見える。

そして、この「折物寄遠」を友人との別離に用いた早い時期の詩の例として挙げられるのが、曹植「離友詩」である。

曹植「離友詩」（『芸文類聚』卷二九）  
 涼風肅兮白露滋 涼風肅として 白露滋し  
 木感氣兮条葉辭 木は氣に感じて 条葉辭す  
 臨淥水兮登重基 淥水に臨んで重基に登り  
 折秋華兮采靈芝 秋華を折りて靈芝を采る  
 尋永帰兮贈所思 永く帰るを求めて思ふ所に贈る  
 感離隔兮会無期 離隔に感ずるも 会ふに期無く  
 伊鬱悵兮情不怡 伊に鬱悵として 情は怡はず

冒頭二句は秋の景物を詠み、続く二句で清らかな川に臨む高山に登り、秋華を折りとり靈芝を摘みとつて、遠く去る人を尋ねもとめて贈ろうとする。もしこの秋華や靈芝を折りとつて相手に贈る行為が送別の場で行われたものであれば、草木を送別の贈りものとする早期の例となるのだが、「永帰」と言い、また次句に「感離隔兮無期」とあるところからも、この詩は既に相手と別れた後、遠くにいる相手を思う遠別離の作と考えるのが自然であろう<sup>[14]</sup>。

このように遠く離れた友人を思つて草木を折りとつて贈るという発想は、時代が下つて謝靈運「南樓中望所還客詩」(『文選』卷三〇)にも「瑶華未堪折、蘭苕已屢摘。路阻莫贈問、云何慰離析。」(瑶華未だ折るに堪へざれど、蘭苕已に屢摘めり。路阻りて贈問する莫ければ、云何ぞ離析を慰めん。)と見える。

また謝朓の「郡内高齋閑坐答呂法曹」(『文選』卷二六)には「惠而能好我、問以瑶華音。」(惠みて能く我を好し、問ふに瑶華の音を以てす。)とあり、相手から贈られた詩を「瑶華音」と表現する。相手から贈られた詩を香草に譬えることは先に引用した西晋の詩にも見えたが、この謝朓の例は「楚辭」九歌「大司命」の「瑶華」の語を踏まえることで、相手の詩を美化するだけではなく、遠く離れた人を思つて贈つてくれた歌という意味も含まれると考えると面白い。

梁では、次の范雲の「送沈記室夜別詩」などがその例として挙げられる。この詩は沈約と別れる時に作られた送別詩であり、詩の前半は送別の場の景物を描き、後半は沈約と別れた後のことを仮想し、互いに草木を折りとつて相手を思う姿が描かれている。

#### 范雲「送沈記室夜別詩」(『芸文類聚』卷二九)

桂水澄夜分	桂水	夜分に澄み
桂山清曉雲	桂山	曉雲に清し
秋風兩鄉怨	秋風	兩郷の怨
秋月千里分	秋月	千里の分
寒芝寧共採	寒芝	寧ぞ共に採らん
霜猿行獨聞	霜猿	行く独り聞く
捫蘿意遺我	蘿を捫りて	我に遺らんと意はば
折桂方思君	桂を折りて	方に君を思はん

後半四句は、まず別れた後にはともに寒芝を折ることもできなくなることを言い、独り悲哀を帯びた猿の声を聞くことになることを歎く。そして結びの二句では、あなたが私に「蘿」を贈ろうと思う時には、私も「桂」を折りとつて、あなたのことを思い慕っているでしようとして、別後に草木を折りとつて、互いに相手を思う姿を描く。

齊梁の詩には、この范雲の結び二句のように、遠く離別する友人のことを思つて草木を折る、或いは草木を贈ろうとする例が他にも見られる。贈答詩では、例えば呉

均「贈周散騎興嗣詩三首」其二(『文苑英華』卷二四七)

に「願持江南蕙、以贈生芻人。」(願はくは江南の蕙を持ち、以て生芻の人に贈らん。)、沈約「贈劉南軍季連六章」其五(『文館詞林』卷一五八)に「結枝以贈、寄之飛鴻。」(枝を結びて以て贈り、之を飛鴻に寄せん。)などである。

この他に閨怨詩に多くの例が見られることは言うまでも無いが、詠物詩にも香草や花木を贈りものとするモチーフを用いて、ひっそりと茂る「青苔」は誰も贈りものとはしないとか<sup>[15]</sup>、雪に被われた草木を「瑶華」に代えて「離居」に贈る<sup>[16]</sup>というように、遊戯的に用いる例も見える。

このように齊梁期には贈りものとして香草や花木を用いる例は非常に多いのだが、送別の贈りものとして香草や花木を詩中に読み込む例は、先の呉均の例以外に齊梁の詩には用例を見いだすことができず、また陳の詩にもいまだ用例を見いだせていない。

呉均の「酬別江主簿屯騎」のように、言葉を贈ることと「蘭蕙」のような香草を贈ることが対比的に用いられる例も見られ、また香草や花木を遠くの人に贈る「折物寄遠」のモチーフが齊梁の詩には大量に用いられていることから、送別の贈りものとして、香草や花木を用いると言う発想が現れてもおかしくはないのだが、南朝期にはまだ詩歌の世界にその例は顕著には現れてはこないようである。

#### 四、小結

本稿では三国晋南朝期の送別詩を中心に、彼らが何を贈り合い、また何を贈るべきと考えていたのかを探ってきた。

送別の贈りものは古くから財物や礼物などの物を贈る場合と、価値のある良き言葉を贈る場合とがあり、君子や仁人は言葉を、庶人や富貴は財物を贈るという認識があった。そして、言葉を用いた特殊な様式としての詩が送別の時に盛んに贈られるようになるのは、後漢末・三国の頃であり、その頃には送別詩の詩中にも、送別の贈りものとして詩を贈る行為が詠み込まれるようになり、西晋期には詩中に送別に贈る言葉(教訓や古言)を詠み込むことも広く行われていたようである。

また西晋の詩には財物や礼物などの物を贈ることを前提とし、次善の贈りものとして言葉を贈るとする表現が常套句のように用いられ、その一方で、西晋から劉宋にかけては、言葉の価値を財物や礼物よりも高く見積もろうとする考えも浮かえた。

では、どのような言葉が送別に贈るべき言葉として、価値を持ち始めるのか。本稿が目的とした送別の贈りものから、その詩人やその詩人が属する共同体の価値観を読みとるためには、この点をさらに追究しなければならぬのだが、今回はそれを深く追究することができなかった。

ただここで一つ指摘しておきたいことは、この時期の送別詩には、古く伝統的な価値のある物や言葉以外のものを、送別の贈りものとする例がほとんど見当たらないということである。

例えば、潘尼「贈陸機出為吳王郎中令」では、「璵」や「璠」のような美玉に代わる宝として「寸晷」すなわち時間を宝として贈ると言い、時間という抽象的な事象を送別の贈りものとして贈る例のように読める。しかしこれは前述のごとく『淮南子』原道訓に基づく語であり、出典を持つ価値ある言葉であった。それは呉均「酬別江主簿屯騎」の「北堂萱」も同じであり、一見、それまでにない新しい種類の送別の贈りものかと思える例にも必ず出典があり、出典を持った言葉であることによって、むしろそれは送別の贈りものとして価値を持つのである。

稿者の調査に遺漏がある可能性もあり、断定はできないが、三国晋南朝期の詩においては、古い出典を持つ言葉や物が送別の贈りものとして価値をもち、この時期にはそのような背景を持たない送別の贈りものが詩中に詠み込まれることは稀のようである<sup>[7]</sup>。それは「折物寄遠」のモチーフが、斉梁期以前の詩には送別の贈りものとして用いられず、「折物贈遠」に容易に転換しないことの一つの要因ともなっているのかもしれない。

右のような問題も含め、更に後代の用例にも視野を広げつつ、送別の贈りものとして、どのような言葉や物が価値を持つようになるのかということは、引きつづき考

とある。

[2] 拙稿「梁陳の折楊柳―攀折の「折楊柳」―」（『中国中世文学研究』六〇号・二〇一二）、同「唐代の折楊柳―「折柳寄遠」から「折柳贈別」へ―」（『国語教育研究』五六号・二〇一五）。

[3] 本稿では、旅立つ人を見送る時に作られた詩、またその時を詠む詩を「送別詩」とする。「送別」と同類の語に「離別」があるが、「離別」は人と人が別れている状態や関係を指し、「送別」よりもやや意味が広い。本稿では旅立ちの時に相手に何を贈り合うのかということを考察の対象とするため、「送別」の語を用いる。ただ、当時の詩には作詩の状況が不明なものもあり、また題名から送別の作と判断できる詩も、題名と本文の内容とが必ずしも一致しない例もあるため、考察に当たってはその点にも留意した。

[4] この他にも鄭風「女曰鷄鳴」に「知子之来之、雜佩以贈之。」（子の之を来すを知らば、雜佩以て之に贈らん。）とあり、鄭箋はこれを帰国する他国の賓客をもてなし、厚意を伝えるためのものとする。

[5] 『毛詩』衛風「木瓜」では、「木瓜」「木桃」「木李」を贈られたお返しに「瓊琚」「瓊瑶」「瓊玖」をもって報いることを言う。詩序はこれは斉の桓公が狄人の攻撃を受けた衛国を救い、車馬器服を贈ったことに対して、衛人がこれに報いるために作った詩とする。

[6] この他に、蘇武「詩四首」其一（『文選』卷二九）に「我有一樽酒、欲以贈遠人。願子留斟酌、叙此平生親。」（我に

えるべき課題である。

また西晋以後の贈答詩では、相手から贈られた詩や自分が贈る詩を草木や玉石に譬える例が多く見えた。この相手の詩や自分の詩を、何にどのように譬えるのかということを追えば、そこには詩や歌に対する彼らの認識や価値観が見えてくるであろう。この点についても稿を改めて論じたい。

## 注

[1] 『顔氏家訓』風操に「別易会難、古人所重。江南餞送、下泣言離。有王子侯、梁武帝弟、出為東郡、与武帝別、帝曰、我年已老、与汝分張、甚心惻愴。數行淚下、侯遂密雲、赧然而出。坐此被責、飄飄舟渚、一百許日、卒不得去。北間風俗、不屑此事、歧路言離、歡笑分首。然人性自有少涕淚者、腸雖欲絕、目猶爛然。如此之人、不可強責。」（別れは易く会ふことは難きは、古人の重んずる所なり。江南の餞送には、泣を下して離を言ふ。王子侯有り、梁武帝の弟にして、出でて東郡と為り、武帝と別るるに、帝曰はく、我年已に老ひたり、汝と分張し、甚だ心惻愴たりと。數行涙下る、侯遂に密雲し、赧然として出づ。此に坐して責められ、舟渚に飄飄たること、一百許日、卒に去るを得ず。北間の風俗、此の事を屑しとせず、歧路に離を言ふは、歡笑して分首す。然り人の性には自から涕淚少なき者有り、腸は絶えんと欲すと雖も、目は猶ほ爛然たるがごとし。此の如きの人、強ひて責むべからず。）

樽酒有り、以て遠人に贈らんと欲す。願はくは子留りて斟酌し、此の平生の親を叙べよ。」とある。「願子留斟酌、叙此平生親」とあるように、これは送別の贈りものとして酒を贈るというよりは、しばし饌別の酒宴をとにもすることを言うためのものであろう。

[7] 同氏「建安詩人による送別の贈答詩について」（『日本中国学会報』第四一集・一九八九・三四頁）参照。

[8] 同氏前掲論文参照。

[9] また蔡邕「答对元式诗」（『芸文類聚』卷三一）に「君子博文、貽我德音。」（君子博文にして、我に德音を貽る。）、同「答卜元嗣诗」（『芸文類聚』卷三一）に「斌斌碩人、貽我以文。辱此休辞、非余所希。敢不酬答、賦誦以帰。」（斌斌たる碩人、我に貽るに文を以す。此の休辞を辱くするは、余の希む所に非ず。敢て酬答せざらんや、賦誦して以て帰る。）とあり、相手から詩文を贈られたこと、またそれに答えて返しの詩歌を贈ったことを言う。

[10] 『毛詩』大雅「抑」に「其維哲人、告之話言、順德之行。」（其れ維れ哲人、之に話言を告ぐれば、徳に順ひて之れ行ふ。）とあり、その毛伝に「話言、古之善言也。」（話言は、古の善言なり。）とある。また陶淵明「贈長沙公」（『箋注陶淵明集』卷二）にも「何以写心、貽此話言。」（何を以て心を写さん、此の話を貽る。）とある。

[11] 全釈漢文大系『文選三』（集英社・一九七四）では、この「璵璠」を「詩歌」のこととして訳す。詩を美玉に譬える例は西晋の詩にも見えるが、それは相手の詩を美化する場合で



あり、自分の詩を玉に譬える例は西晋の詩には他に見当たらないようである。

〔12〕松原朗氏『中国離別詩の成立』（研文出版・二〇〇三・五五頁）参照。

〔13〕鈴木修次氏『漢魏詩の研究』（大修館書店・一九六七・四四六～四五〇頁）。

〔14〕この詩は曹植の集では「離友詩三首」の一首とされており、その「離友詩」の序文には夏侯威との送別の時に作られたとある。これに対して、松原氏は、この詩は離別の現場に即しておらず、「作者は想像の力をかりて、別後の寂寞たる境遇の中にみずからを描き、そこを起点に、別れた友人を懐しむのである。」（同氏前掲書・二五頁）とする。また趙幼文氏は『三国志』魏書・武帝紀の記事に基づき、この詩は夏侯威を懐つたものではない可能性があると指摘しており（曹植集校注）人民文学社・一九八四）、そもそも送別の時の作ではなかった可能性もある。

〔15〕沈約「詠青苔詩」（『初学記』卷二七）に「繁鬱無人贈、葳蕤徒可憐。」（繁鬱 人の贈る無く、葳蕤 徒らに憐むべし。）とある。

〔16〕裴子野「詠雪詩」（『芸文類聚』卷二）に「払草如連蝶、落樹似飛花。若贈離居者、折以代瑤華。」（草を払へば連蝶の如く、樹に落つれば飛花に似る。若し離居に贈らんとせば、折りて以て瑤華に代へん。）とある。

〔17〕沈約「送友人別詩」（『芸文類聚』卷二九）には「同心扇」を送別の贈りものとする例が見える。「同心」は『周易』繫

辭伝上の「二人同心、其利斷金。」（二人 心を同じくせば、其の利きこと金を断つ。）に基づく語であり、それが「扇」と結びつくのは、班婕妤「怨歌行」（『文選』卷二七）に「裁為合歡扇、团团似明月。」（裁ちて合歡の扇と為し、团团 月に似たり。）のような閨怨詩の要素を合わせたものかと解釈できる。また齊梁の詩には別離の時又は別離の時に共に草木を折ることが詠まれており、梁元帝「折楊柳」（『芸文類聚』卷八九）にはそれを「同心且同折」と表現する例も見える（前掲拙稿「梁陳の折楊柳―攀折の「折楊柳」―」一五・一六頁参照）。この沈約の例は、或いは伝統的な価値観に、新しい価値観を加えた贈りものの例と言えるかもしれないが、この他に同類の例がこの時期の詩には見えず、また稿者の見落とした出典が他にあるかもしれないので、いまは例外として、ここに指摘しておきたい。